

延永^{のぶなが}ヤヨミ園遺跡 現地説明会資料

～古墳時代の大都会！？～



上空から見た遺跡の様子（合成写真）

2010年4月29日（木）13：00～
福岡県教育委員会文化財保護課

なぜ調査をしているのか？

この遺跡は東九州自動車道の建設にさきがけて、発掘を行っています。道路や建物などが造られる際には、その場所に遺跡がないかどうかを調べ、もしあった場合には調査をすることになります。遺跡調査をしなかった場合、そこにどんな人たちが住んでいたのか、どんな暮らしをしていたのかといった過去の人々や社会の様子がわからなくなってしまうためです。

調査をしたことは詳細に記録を取り、後日報告書という形でまとめられます。図書館や博物館においてありますので、自分の家に遺跡があったかどうか、昔はどんな人々が住んでいたのかを調べられるかもしれません！？

どんなものが出ているのか？

延永ヤヨミ園遺跡は、標高 10m 前後の高台で、すぐ近くにはピワノクマ古墳、北側の低地を上っていった先には椿市廃寺があるという位置になります。

今年度の調査では、弥生時代の終わり頃と古墳時代後期の竪穴住居跡が 120 軒以上、掘立柱建物 5 棟、土壙、溝など非常にたくさんの人々の活動の痕跡が見つかっています。これは他の遺跡に比べて格段に多く、遙か昔から人々がこの土地に好んで住んでいたと言えるでしょう。

遺構編

遺構とは、過去の人々の活動の痕跡のうち、建物や工作物など、不動産的なもののことです。例えば住居や倉庫、溝やお墓などがそうです。これらは、持って帰ることが難しいため、現場で記録をとり、調査後には埋め戻されます。

たてあなじゅうきょあと 竪穴住居跡

竪穴住居跡が 120 軒以上見つかっています。竪穴住居は地面を掘りくぼめて、その上に屋根をかけた家のことで、多くの遺跡で発見されていますが、これほどの量が出ることはほとんどありません。

時期は弥生時代の終わり頃～古墳時代の初め（約 1,700 年前）と古墳時代後期（約 1,500 年前）の 2 時期に分かれています。弥生時代の住居の方は数が少なく、多くは古墳時代後期に属しています。古墳時代後期の住居は同じ場所に何軒も、何回も立て直したの



だと考えられます。また、古墳時代後期の住居にはカマドが作られているものが多く、写真のように、火にかけるときに甕を支えるためと考えられる土器が中央に置かれているものがありました。



ほったてばしら 掘立柱建物跡

今回の調査では5棟ほどの掘立柱建物が見つっています。掘立柱建物はその名の通り、穴に柱を立てた高床式の建物で、家や倉庫などに使ったと考えられています。実際の発掘では柱の穴しか出てこないで、柱穴が四角形に並ぶものを探したり、出てくる土器が同じ時期のものをつなげたりして見つけます。

多くのものは2×3本ほどの柱で穴も小さいものが多いのですが、今回丘陵の北側で見つかった1棟は、奈良時代頃（約1,300年前）のもので一つの柱穴が1m四方と大きく、3×5本以上の規模を持っています。また、隣の県道の調査では3面にひさしを持つという特殊な構造をもつものが見つっています。これは昔の役所など特別な施設に使われると考えられるものです。

溝(環濠) かんごう

現在は埋められており土山の下となっていますが、弥生時代終わり頃から古墳時代初め頃の大きな溝が見つかりました。溝の大きさは、幅2.5～4mで、深さは1.5m、断面はV字形をしており、急勾配で向こう岸に行くにも一苦労します。道路の反対側を掘ってみると、直角に東に折れ曲がる事がわかりました。これは吉野ヶ里遺跡で代表されるような“環濠”という集落の周りを囲むものであった可能性があります。もう一本同じ時代の溝がヒ字状につくことからムラの中の区画の意味も持っていたかもしれません。ただし溝の内側からは、当時の住居などがあまり見つかっていないので、このことがどういうことを示すのかはこれから検討していかなければいけません。

この他にも奈良時代の掘立柱建物と同じ時期や中世の溝も見つかり、区画や排水のためと考えられます。



遺物編

遺物とは、過去の人間が残したもののうち、遺構とは違い、動かすことのできるものことです。例えば、土器や石器、木器、青銅器、鉄器など博物館で見ることの出来るもののほとんどが遺物になります。遺跡から出てきた遺物は、どこから出たのか記録した上で持って帰り、洗って復元します。博物館や資料館に展示されているものもこのような流れを経ています。

須恵器と土師器

弥生土器や土師器が一般的にわらを積んでその中に土器を入れて焼く野焼きで、焼成温度も800℃程度であったのに対し、須恵器は窯（かま）を造り1100℃ほどの高温で焼き上げています。そのため土師器に比べ、須恵器の方がかなり固く、焼きしまっています。また、色も土師器が赤っぽい色なのに対して、須恵器は灰色や青っぽい色をしています。須恵器は固くて粘土の粒が細かいため、水など液体の貯蔵に適しています。一方、土師器は煮炊きに使用されており、カマドでもススの付いた土師器が出ています。

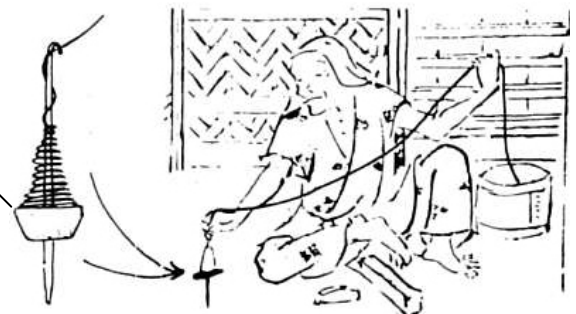
今回の調査では、須恵器では、蓋付きの器（うつわ）である坏（つき）や水瓶と考えられる甕（かめ）、食べ物を盛る高坏（たかつき）などが、土師器では煮炊きに使用された甕、蒸し器である甑（こしき）などが出土しています。

また、古墳に飾られる器台という須恵器や、普段は須恵器で作られる、水差しやお祭りに使うハソウという土師器が出土しています。



紡錘車

紡錘車は、植物や動物の繊維に撚り（より）をかけて糸を紡ぐ時に使う弾み車です。円盤の中央に空けられた孔に棒を通して回転させ、その棒に撚った糸を巻取っていきます。材質は石製のほか土製と鉄製があります。今回の調査では、住居から滑石という軟らかい石でつくられたものが見つかっています。家の中で糸を紡いでいたのでしょうか？



砥石

砥石は現代と同じく、ものを研ぐためのもので、弥生時代（2000年以上前）から使う石材や形がほとんど変わっていません。古代から今に伝わるものの一つといえます。



まがたま 勾玉

言わずとしれた代表的な装飾品です。今回の調査では、メノウなどの石製のものや土で作られたものが出土しています。



その他の遺構や遺物

奈良時代より後の時代でも、中世（鎌倉時代）と考えられる溝が見つかっています。この他遺物でも、石や鉄で作られた矢尻や刀子という鉄でできた小刀、首飾りに使ったと考えられるガラス玉、木の伐採に使う石斧の破片などが出土しています。

おわりに

今回の調査によって、弥生時代の終わりから古墳時代には多くの家が建っていたことがわかりました。また、すぐ近くの国道201号行橋バイパス建設や県道直方行橋線建設にかかる延永ヤヨミ園遺跡の調査でも同じ時代の住居が合計100軒以上出ています。これらのことから、当時としては大集落、大都会だったといえるでしょう。

ところが、奈良時代になると家はほとんど無くなってしまい、数軒の建物や溝が作られています。近くの調査では、ひさしをもつ掘立柱建物がみつかり、木簡や文字を書いた土器、硯などがみつかりました。これらのことから、当時はほとんどいなかった文字を読み書きできる人々の存在がうかがわれ、建物群は役所のような施設であったと考えられます。延永から1kmほど東には、古代の京都平野の主要な港とされる「草野津」の推定地があり、3kmほど西には古代のお寺である椿市廃寺もあることから、港に関連する役所であった可能性も考えられます。

遺跡は発掘後埋め戻して、工事が行われますが、周辺にはまだ多くの遺跡があり、皆さんの家の下や、田んぼの下、そして道路の下にも過去の人々の生活の跡が残っているかもしれません。ぜひこれを機会に調べてみてはいかがでしょうか。

本日はありがとうございました。